

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26293484

研究課題名(和文) 外来受診患者の潜在的在宅ケアニーズの早期把握および対処方策の開発

研究課題名(英文) Development of methodology for early assessment and support for potential home care needs among outpatients

研究代表者

永田 智子(NAGATA, Satoko)

慶應義塾大学・看護医療学部(藤沢)・教授

研究者番号：80323616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：全国の100床以上の病院への調査の結果、半数以上の病院の外来において、半数以上は在宅療養支援を要する患者の把握のための取り組みが行われていた。

1 特定機能病院の外来看護師にたいして、在宅療養支援の実施状況を尋ねたところ、実施していたのは半数以下で合った。在宅ケアの知識や関係職種とのコミュニケーションが多いほど在宅療養サービスへつなぐ支援を実施していた。

在宅療養支援を要する患者を把握するための観察項目には、患者の治療や病状、受診行動のとり方、同行者の様子、患者の在宅での様子、自己管理やセルフケア状況などの把握があげられ、調査の結果、90%以上の看護師がほとんどの項目が重要であると回答した。

研究成果の概要(英文)：The nationwide survey for the hospitals with 100 or more beds showed that more than 50% of hospitals were "making efforts" to perceive needs of the needs of home care support for outpatient.

The survey for the nurses working outpatient clinic at a special functioning hospital shows that less than half nurses were doing the support for home care needs among the outpatients. Nurses who have more knowledge about home care or make more communication with other professionals were likely to do the support to refer the home care support for outpatients.

Observational points to grasp home care need of the outpatients are including their treatment and disease condition, how to visit to hospital, situation of attendant, self management and self care and so on. As to the survey, 90% or more nurses answered most of these points were important.

研究分野：在宅看護学

キーワード：外来 在宅療養支援

1. 研究開始当初の背景

病院の在院日数が短縮化され、医療ニーズを有する患者の退院が増加している。入院患者に対する退院支援は、診療報酬の整備とともに普及し、多くの病院で退院支援を要する患者のスクリーニングが実施され、必要と判断された患者には専門スタッフが退院に向けた調整を行うようになってきている。地域ケア提供者との連携も重視され、退院前の合同カンファレンスや退院前後の文書による情報共有が一般化しつつある。

一方で、外来でのがん化学療法の普及に加え、がん末期でも自立度が高い患者はサービスを受けずに通院のみ行うことも増えている。これらの患者においては、病状が悪化した際、外来通院から直接在宅ケアに移行し、サービスを利用することになるが、その体制は十分整っているとは言えない。前述の退院支援に関する診療報酬は「入院患者」に対する算定であり、外来患者への在宅ケア調整に対する報酬上の裏付けはない。さらに、病状の悪化や環境の変化に伴い、生活上の困難さが増していても、短時間での外来診察では気づかれずに経過し、その結果、計画的に在宅サービスを導入していれば防げたはずの入院を余儀なくされる場合も見受けられる。在宅ケアを主とした緩和ケア外来なども増えているが、多くの患者は一般病院に通院しており、在宅ケアとの連携がスムーズとは言えない。

「外来受診」は患者と医療機関がつながる貴重なチャンスだが、これまで、外来受診患者に対する潜在的な医療ニーズ・生活ニーズを把握する試みは殆どされてこなかったと言える。患者が病院に来院し、医学的所見が得られる点で、外来受診のタイミングはケアマネジメントにおけるケース把握の重要な機会であるが、対象数の多さや時間的制約、対応する医療職の人員上の制約から、機能していないのが実態である。

本研究では、外来通院中の患者を対象とし、見過ごされているニーズを把握し、早期に対応するためのシステムを構築し、患者の健康状態・QOLの向上、病状悪化による再入院や長期入院の防止、およびケアシステムの効率化を図ることを目指す。

2. 研究の目的

本研究では、外来通院中の患者を対象とし、ヒアリングや実態調査により、外来における効率的なニーズ把握とケアマネジメントの方策を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、「外来での在宅療養支援に関する全国調査」、「1病院における外来看護師に対する在宅療養支援の実態調査」、「患者の在宅療養支援ニーズの把握方法に関する調査」、「退院後在宅療養を継続できた患者に対し医療スタッフが行ったケアの特徴とそれ

を可能にした要因に関する質的研究」、「外来での在宅療養支援カンファレンスに関する研究」を実施した。

1) 全国の病院における外来での在宅療養支援に関する実態調査

2015年に一般病床100床以上の2541病院に調査票を送付し、病院と外来の特徴および外来看護の状況を把握している看護職に回答を依頼した。調査内容は、先駆的事例のヒアリングや文献から得られた、在宅療養支援を持つ外来患者の把握方法や、それに対する支援システムに基づき、これらの実施状況について尋ねた。加えて、外来看護師の在宅療養支援に関する認識や、外来看護の提供方法などの基礎情報も尋ねた。

2) 特定機能病院における外来看護師による在宅療養支援の実態

特定機能病院であるA病院の外来看護師に対し、まずヒアリングで在宅療養支援の実施内容を尋ねて質問項目を作成した。そのうえで、外来看護師93名全員に対する質問紙調査を実施した。

3) 外来における在宅療養支援ニーズの把握方法に関する調査

2015年に実施した全国調査で今後も調査協力可能と回答した454病院のうち外来患者の在宅療養支援ニーズ把握の取り組みを行っていた15病院に所属する外来看護師に対し、支援事例に関する半構造化面接を実施するとともに、理解を高めるために参加観察を行った。結果を分析し、在宅療養支援ニーズに気づくために収集している情報を整理した。この結果を用いて質問紙を作成した。

2015年に実施した全国調査で在宅療養支援ニーズ把握の取り組みを行っていると回答した436病院を対象病院とし、1病院あたり最大5名の外来看護師を対象とした質問紙調査を実施した。

4) 退院後在宅療養を継続できた患者に対し医療スタッフが行ったケアの特徴とそれを可能にした要因に関する質的研究

X 大学病院の循環器内科病棟および外来を対象病棟とし、循環器内科病棟と外来に関わって退院できた患者2事例について、関わった医師、病棟看護師、外来看護師を調査対象者とし、ヒアリング調査の質的機能的分析を実施した。

5) 外来での在宅療養支援カンファレンスの標準化と実行可能性を高めるための研究

アクションリサーチを用いた質的事例研究を実施した。研究参加者はA大学病院外来看護師と研究者で、方法は、会議録等を基に、ストリンガーの「見る」「考える」「行動する」のらせん状のプロセスに沿って記述した。

4. 研究成果

1) 全国の病院における外来での在宅療養支援に関する実態調査

回答があった一般病床 100 床以上を有する 657 病院のうち、347 病院で外来看護師による在宅療養支援ニーズの把握の取り組みを実施していた。在宅療養支援ニーズの把握の取り組みを実施している病院は外来看護に関する診療報酬を算定している、外来看護師に相談するコーナーがある、外来で行う看護に明確な方針・理念がある、勉強会などを実施し知識を共有する取り組みをしているという特徴を有することが明らかになった。

2) 特定機能病院における外来看護師による在宅療養支援の実態

ヒアリング調査の結果から、在宅療養支援の実施内容として、【病状及び医療処置への支援】【治療継続支援】【意思決定支援】【在宅サービス利用支援】の4つのカテゴリーと、14のサブカテゴリーが抽出された。

外来看護師への質問紙調査の結果、【在宅サービス利用支援】の実施頻度では「ほとんどない」と回答した人が半数以上であった。また、在宅療養支援を十分に行っている群(実施群)は2割であった。実施群は十分に行っていない群(非実施群)と比較して、在宅療養支援に関わる知識を十分に持ち、関係職種とコミュニケーションを十分に取っていた。

3) 外来における在宅療養支援ニーズの把握方法に関する調査

半構造化面接の結果、在宅療養支援ニーズを把握するための情報として、患者の治療や病状、患者の受診行動のとり方、同行者の来院時の様子、患者の在宅での様子、患者・介護者の自己管理やセルフケア状況、患者・介護者の在宅サービスへの認識・申請状況の6カテゴリー、41項目が挙げられた。

質問紙調査では 1015 名の外来看護師から回答を得た。在宅療養支援ニーズを把握するための観察・実施項目 41 項目のほとんど全ての項目に対して、8 割近くの看護師が、患者の在宅療養支援ニーズに気づくために重要な項目である(「非常に重要である」「重要である」を「重要」な項目とする)と回答していた。また、【患者の治療や病状に関する項目】は、8 割以上の看護師が実施している(「常にしている」「時々している」を「実施している」)と回答、【自己管理やセルフケアに関する項目】は、7 割以上が実施していると回答していた。各項目の観察や実践を普段「実施している」と回答した者の割合が最も高かった項目は「患者から、症状の悪化や苦痛等の自覚症状の訴えがないか」で 97.3%だった。一方、来院方法に関する項目や在宅サービスに関する項目は実施率が低かった。

4) 退院後在宅療養を継続できた患者に対し医療スタッフが行ったケアの特徴とそれを

可能にした要因に関する質的研究

患者に行われたケアの内容では、【症状を悪化させないために自己管理を継続するよう支援する】、【疾病や症状を悪化させないために治療や支援を継続する】が抽出された。またケアの要因および背景として【対象患者に関わった医療スタッフ内でケアの目的を一致させる】、【ケアに必要な情報の収集とアセスメントを行う】が要因として抽出された。

5) 外来での在宅療養支援カンファレンスの標準化と実行可能性を高めるための研究

1 クール目の「見る」では、実態を把握するために外来の在宅療養支援カンファレンスの実態調査を行った。「考える」では、在宅療養支援カンファレンスマニュアルを作成し、「行動する」では、そのマニュアルを基に2診療科でカンファレンスを実施した。

2 クール目の「見る」では、外来の現状を把握するために外来看護師とディスカッションの機会を設けカンファレンスの現状と課題を共有した。挙げた課題を解決するために、ワーキンググループを立ち上げた。実施頻度は1ヶ月に1回、1時間程度であった。「考える」では、各々が模擬事例を出し合い、カンファレンスを体験し、実行可能性を高めるための方法を話し合った。

その結果、事例提供者の準備内容や司会に必要なファシリテート方法、時間の短縮方法を言語化し、共有することができた。また、在宅療養支援カンファレンスの標準化に向けて、マニュアルに必要な内容を明らかにし加筆修正した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 錦織梨紗, 永田智子. 外来看護師による在宅療養支援ニーズ把握の実態: 一般病院を対象とした全国調査. 日本地域看護学会誌, 20(2), 29-37, 2017 (査読あり)
2. 佐藤日菜, 田口敦子, 永田智子, 山内悦子, 浦山美輪, 戸村ひかり, 鷲見尚己. 特定機能病院における外来看護師による在宅療養支援の実態. 日本地域看護学会誌, 20(2), 80-86, 2017 (査読あり)

〔学会発表〕(計 6 件)

1. 永田智子, 錦織梨紗, 戸村ひかり, 田口敦子, 鷲見尚己. 外来における在宅療養支援に関する研究の現状: 文献レビュー. 第35回日本看護科学学会学術集会 2015年
2. 田口敦子, 佐藤日菜, 浦山美輪, 山内悦子, 深谷真理子, 永田智子, 戸村ひかり, 鷲見尚己. 特定機能病院に勤務する外来看護師による在宅療養支援の実態 (第1

報) ヒアリング調査による支援内容の
明確化 , 第 19 回日本地域看護学会学
術集会, 2016 年

3. 佐藤日菜, 浦山美輪, 山内悦子, 深谷真
理子, 田口敦子, 永田智子, 戸村ひかり,
鷺見尚己. 特定機能病院に勤務する外来
看護師による在宅療養支援の実態 (第 2
報) 質問紙調査による支援状況の明確
化 . 第 19 回日本地域看護学会学術集
会, 2016 年
4. 角川由香, 成瀬昂, 永田智子. 外来患者
への在宅療養支援の実態に関する全国
調査—退院支援部署による外来患者へ
の支援に焦点を当てて—. 第 37 回日本
看護科学学会学術集会, 2017 年
5. 剣持麻美, 松永篤志, 田口敦子, 佐藤日
菜, 山内悦子, 菅野エリ子, 浦山美輪, 永
田智子, 退院後在宅療養を継続できた患
者に対し, 医療スタッフが行ったケア
の特徴とそれを可能にした要因. 第 20
回日本地域看護学会学術集会, 2017 年
6. 前田明里, 角川由香, 永田智子. 外来看
護師が患者の在宅療養支援のニーズに
気づくために収集している情報. 第 20
回日本地域看護学会学術集会, 2017 年

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

「外来での在宅療養支援」

<http://gai-raizaitaku.yupia.net/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

永田 智子 (NAGATA, Satoko)

慶應義塾大学・看護医療学部・教授

研究者番号: 80323616

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

鷺見 尚己 (SUMI, Naomi)

北海道大学・保健科学研究院・准教授

研究者番号: 30372254

田口 敦子 (TAGUCHI, Atshuko)

東北大学大学院・医学研究科・准教授

研究者番号: 70359636

戸村 ひかり (TOMURA, Hikari)

首都大学東京・看護学部・非常勤講師

研究者番号: 90633173

成瀬 昂 (NARUSE, Takashi)

東京大学大学院医学系研究科・講師

研究者番号: 90633173

(4)研究協力者

錦織 梨沙 (NISHIKOORI, Risa)

佐藤 日菜 (SATO, Hina)

浦山 美輪 (URAYAMA, Miwa)

山内 悦子 (YAMAUCHI, Etshuko)

深谷 真理子 (FUKAYA, Mariko)

角川 由香 (SUMIKAWA, Yuka)

剣持 麻美 (KENMOCHI, Mami)

松永 篤志 (MATSUNAGA, Atsushi)

菅野 エリ子 (KANNO, Eriko)

前田 明里 (MAEDA, Akari)